

イラク十日間の旅 (二)

——昭和五十四年十一月三日より——

鎌倉 神野 幸 人

十一月七日 (水)

六・三〇 起床。断水。

洗面を断念して窓外を見ると、川辺の道を牛を曳いた農夫が散歩している。小生もカメラを持って早速散歩に出た。

ホテルの東隣に農家があり広い庭に婦人が牛を出していた。その隣地は広いナツメ椰子の林があって、その実に雀が群がり群声はうるさい程である。尾長鳥もいた。谷を渡るような特徴ある飛び方で二、三羽が木から木に移る。そんな風景を右に見て、左に目を転ずると河川敷の広い畑には、名

も知らぬ五十糎程の穀物が白い小さな花を少しつけていた。その彼方の川の中洲には白い水鳥が一団をなしていた。

川添いの一本道が、延々と続く椰子林に細くなつた処、東天が明るくなり、朝靄に柔かい光が射して来た。そんな風景に見とれていると、十数頭の羊を連れた親子が後からやって来た。

ターバンを巻き、細い鞭を持った父親が先に、後にはこれも細い鞭を持った白いズボンの小学校三、四年生程の子供が無言で羊の群と散歩している。

早速写真と思つたがカメラを構えて撮る



バグダッドのアリババ広場

には言葉が通じない、群について行く、時折写す。子供は気になるのか度々振返えつた。その都度カメラをかくす。二杆程随行する。朝日が林の上に昇る頃、前方より耕運機に乗った若者が来た。手をあげて便乗を頼む。快く乗せてくれた。ホテルまで十数分便乗する。川風が少し寒い。水門近くで厚く礼を述べて下車する。ホテルでは皆んな朝食をとっていた。

九・〇〇 徒歩にて工場着。

三井の方にお願いして写真の許可を願ったが「ノー」である。煙突の写真残念だが致し方なし。

昨日打合わせを終了したので今日は為すことがない。同行者は再度検討していたが、小生は、芝生に腰を下ろして植木に導水している老人を見つけ寄って行った。老人は異人に一寸うるさそうな顔をしたが、やがて笑顔になった。四分(1/2)B)のバルブのハンドルを大切に持ち植木の導水を職とする老人は英語を話せない。小生も英語を話せないのです、お互い気楽である。

小生は植物の名を片っぱしから聞いた。
芝生 (ハシミーンシ) ・ ナツメ椰子 (ナハル・タマリ) ・ ユーカラに似た木 (ガロントージ) ・ ヒマラヤ杉に似た木 (エセン) ・ その他 カーシ……………?
煙突 (ポーゼイ) ・ 水 (マイ) ・ セメント (ケンケリ) ・ 水栓 (サムレ) ・ ハンドル (カーチ) ・ ホース (プウーリ)

面白くなった。
目 (エーン) ・ 鼻 (ホッシェ) ・ 唇 (ハルテン) ・ 歯 (スセーン) ・ 耳 (オデニ)

・ 毛 (シュアーラーシ) ・ 鼻ひげ (シュワールビ) ・ 顎ひげ (ラヒゲ) ・ 親指 (オスベバエン) ・ 掌 (アラールハイエイデル) ・ 靴 (ヘデイ) ・ 上着 (エニス)

・ 目鏡 (モンザライ) ……等々。

老人に単語を教わること一時間余り。植木の溝に水も漸く満ちた頃、二人の若者が来て話しかけた。老人は去る。厚くお礼して握手した手は堅く脂気がなかった。

若者二人は英語を話し、英語のわからない小生に手帳に英文をかき、発音して教えてくれた。

What is your name = ハイシハニツク

My name is = エス・ミー

Good morning = ケー・ハル・ノール

Good bye = ユー・ブヤン・ブライ

Good evening = エル・ノール

チン・キエー = シェウ・ラー

巻舌の彼等の発音はとうてい覚えられないが、その親切がうれしかった。

楽しい一時を過ごして現場事務所に戻ると、ここでもみんなが言葉の勉強をしていた。人柄の良いこの責任者は、アッの発音の出ないわれわれに、自分の指を

ライターであぶり、アツと発音してその音を教えてくれたのには感心した。

退屈のような楽しいような一時の間に煙突を一枚盗み撮りして正午すぎ工場を出た。

三井ガラスの一行が帰るまで、迎える車でユーフラテス川辺の農村を見物するのとした。ホテル川向うの椰子林を過ぎると、日本の田圃のように区画整理された畑と、点在する農家がどこまでも続き、農家は土造りながら裕福に見えた。畑は収穫期を終えたのか何も生えてなかったが、切株より青い芽が伸びていて牛や羊がゆうゆうと遊んでいた。四、五軒の集落の中庭では黒いベールの婦人と子供が集まっていた。川辺の広い道をろばに乗った老人が一人道を急ぎ、黒い鳥が点々と畑に餌を求めている長閑な田園風景を楽しんでホテルに帰る。

一六・三〇 ホテル発

ベントンは時速百二十軒〜百四十軒でバグダッドに向う。黄赤色の夕日が砂漠に落ちてゆく。暗くなってバグダッドに着く。チgris川は川畔の灯を映して美観である。ホテル着。シャワーで三日間の埃を落と

す。夕食後、街頭でアイスクリームを食して涼をとり、二二・〇〇頃寝る。

十一月八日 (木)

鶏の声で目を覚ます。ホテル周辺の家屋の屋上に鳩が数十羽群れ、雀も群をなして椰子の木に舞っていた。

パンと紅茶の朝食後、三井物産の事務所でラマデ工場打合せ事項を書類にして提出の後、吾々五人は物産の車で、道具店、工具店、材料店を一巡した後、自由行動となった。

バグダッド博物館

レストランで焼飯、カレー、プリンの一人一・五デナールの昼食の後、一デナールで博物館にタクシーをとばす。

四五、〇〇〇平方メートルの敷地に、一、一五〇〇平方メートルの建物が建ち、展示室は二階建て、四、七〇〇平方メートルというこの博物館は、考古学の分野では世界屈指といわれるにふさわしい立派なものである。

第一室の先史時代の出土品より、ウル、バビロン、ハトラ等々の出土品が順序よく

陳列されていた。その膨大な陳列品の一点を詳細に見るには余りにも知識と時間が無かったが古代オリエントよりイスラム時代に至るまでの概略は掴めるようであった。

第一室の観音像は、この地に東洋色をもたらした古代シルク道路の偉業を偲ばせさせる大小の筒印は柔かい粘土にこれを転がして浮彫煉瓦を造ったという知恵に驚き、ハトラ出土の大きな大理石像の数の多いのにも驚いた。

とにかく、古代を求める人を数千年前にもどすこの博物館は夢の園である。もう一度ゆっくり見学して太古にかえりたいものである。

一巡して出口の看守に英文とアラビア文の本数冊と絵ハガキ数十枚を売ってもらう(ここでは買うのでなく、売ってもらおうという感じである)。英語も話せない小生に守衛はいぶかったが、これで歴史を大切にする先生と友へのお土産が出来、満足して館を出た。

館前の広場にパトカーと白バイが駐車していた。偉丈夫なパトカーの警官と、精悍

な白バイの警官は人が良いのか、記念の写真にポーズをとってくれた。

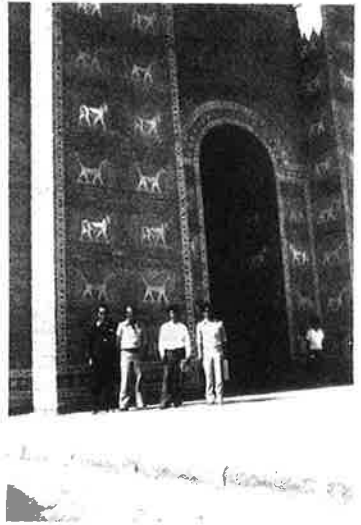
金細工土産店

地獄感の良い高野さんの先導で、ラシット通りまで歩くことにした。学校のひげ時で女学生の姿が目立つ。家具店が軒を並べ一角を過ぎ、バス停に人が群がる所を過ぎ、下町の匂いのする食糧品店街を過ぎてチギリス河にかかるアーラー橋を渡る。夕刻の川風はさわやかである。黄褐色の川に刺網の小舟が一隻網をあげていた。写真を撮りたいが人通りと官憲の目を気にして残念ながら撮らず。

ラシット通りに出たが目指す土産店がない。道を変えて裏道に出た。ラシット通りとチギリス河に挟まれたムスタン……：通りには、間口一、二間の金細工店が数十軒……軒を連ねていた。

雑沓である。女の人が多い。ベールを着た中年婦人、着ない娘、主婦、勤め婦りの娘が指輪やネックレスを求め、又、目の保養にと夕暮の一時を楽しんでいる。

ウインドの金細工を楽しむ。どの店も天秤が置いてある。金細工は目方を計って金



門タルシュイ

商社の御馳走

夕食は三井物産の下郡様宅に招待されていたので、

全く目をみはるもてなしである。厚く厚く礼を述べ腹一杯御馳走になった。

シャワーを浴びてロビーで車を待つ。ホテルの玄関に靴磨きの子供が三、四人いた。小西さんが磨いてもらう。一〇〇フィルスである。

奥様方の雑談に日本人学校の幼稚園の先生が居なくて困っているときき、オリエンタル歴史が好きで今度も同行を望んでいた美智代なら一、二年イラクも良いと思えばとなく話す。

昨日高野さんが磨いたときは五〇フィルスであったという。陽気な靴磨きは人は

賑やかな宴も終る。満腹の礼を述べてホテルに帰る。(今日は二十六回結婚記念日である)

十一月九日(金)

額を決めるそうである。これも金は高価である。諦めて銀細工店に入る。職人らしからぬ服装の店主がいた。飾皿を値切ったら怒った顔で断わられた。

銅細工店に入る。人の良さそうな店主が笑顔で迎えてくれた。英語を話す息子が応待してくれた。安い灰皿とラクダの置物を夫々十個買う。ずっしりと重い。これでお土産ができた。

夕闇迫る頃帰路につく。物凄い人波、車波、三、四人の警官が警笛を鳴らし続けて交通整理、白バイも整理に加勢している。漸くタクシーを拾ってホテルに帰る。

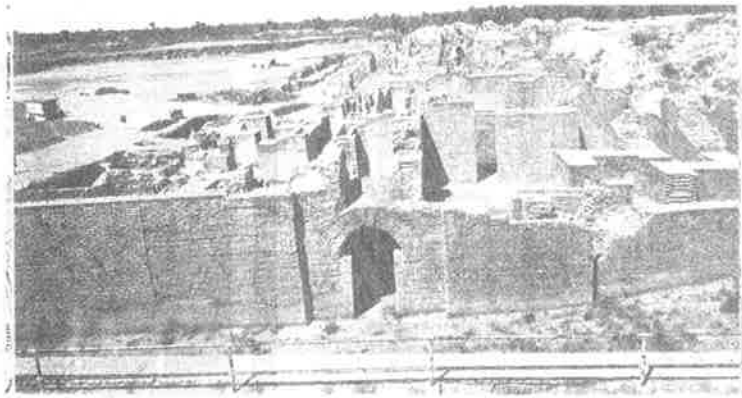
悪く見えないが悪いボスでも居るのだろう。下郡様宅は高級住宅の一角にある。芝生があり、糸瓜に似た植物もあり、ここが砂漠の国かと疑いたくなる。

心づくしの御招待、遠来の客を招くのが海外駐在員の楽しみと聞いていたが、総勢十数人の招待には、社員の若夫婦も応援に来て大変な御苦労である。

数種類のウイスキー、キャビヤもあり、日本のアサヒビール、マグロのトロ、エビ、オデン(コンニャク有り)、ビーフン、やき肉、米飯、味噌汁、タクアン、白菜等々

待望の自由行動である。昨日採田さんにお願ひしてあったベンツが来た。パピロン見物車代二十五デナールとゆずらず。止むなくキャンセル。ホテル前に駐車車のクラウンの頭髮うすく、胸毛と腕毛の濃い四十才前後の運転手は二十デナールで快諾してくれた。

車はナツメ椰子林や、モスクや車の混雑する処を過ぎて南下した。草地や畑が地平線までつづく宏大な平野の中の一木道を車は快走する。コーラン節ともいえるカース



南宮殿跡

テレオが異国の気分を出してくれる。お互に言葉は分らないが表情で説明してくれるうれしさ、楽しい旅である。

バス停に群れる人、便乗の車を待って道端に立つ人、馬車の人、葬儀の行列、小部落の雑踏、その郊外に羊の太腿をぶら下げたカバブの屋台等々を過ぎ、漸く周囲の景色も飽きる頃、約一時間十分程で車はバビロンに着いた。

バビロン

イラク第一の遺跡バビロンは、紀元前(BC)三千年頃(五千年の昔)、シュメールの都市国家群を統合して第一バビロン帝国を建てた。そのバビロンも(BC)七百年頃アッシリア人に徹底的に破壊され、そのアッシリアも(BC)六二〇年頃四国家に分裂し、この地に新バビロン王朝が興り、ネブカドネザル二世(?-B.C.562)の下で最盛期を迎えた。今日見られるバビロンはこの時代の遺跡で一八九〇年末ドイツ王立博物館の援助で、ロバートコードウエルがバベルの丘を掘り始め、十四年間かけて、この二千数百年前の遺跡を発掘したという。

正面玄関のイシュタル門はブルーの釉薬

のかかった煉瓦の壁にライオン、牡牛、首と尾の長い竜のような怪獣ムシュフシユが描かれ、大きな門が当時を偲ばす姿で復元されている。

イシュタルはシュメール人の愛の神イナナがセム族化したもので、洪水伝説の中でも、天地創造神話の中でも重要な役割をする神で、愛の神という性格からギリシヤのビーナスの前身ともいわれている。

イシュタル門からバビロンの守護神マルドークの神殿まで石を敷き、その一つ一つの石の裏側に、

「我はバビロンの王、ネブカドネザル、偉大な神マルドークの行列のため、シャドー石を敷いた。マルドークの神よ我に永遠の生を与え給え」

と彫りつけたという行列道路の両側はムシユフシユやライオンが浮彫された高さ十数米の巨大な煉瓦の壁が復元されている。

この行列道路添いに有名な空中庭園跡がある。また発掘が進められ復元中である。

ネブカドネザル二世が山国から来て緑を恋しがる妻のため造らせたもので、縦四十二



大アーチと婦人

米、横三十米の方形の建物で二層になっていて、一層目は井戸、二層目は七段のテラスの上に木や草が植られ、下の井戸から水を汲み上げて、あたかも空中に浮かんだ庭園のように見えたという。

この空中庭園のある一角を南宮殿といひ地下に埋まった煉瓦の巨群は、砂に覆われて静かに眠っていた。

行列道路の終点近くにバビロンのライオ

ン像がある。王の威力を被征服民に表わす大きな石のライオンと、それに組み敷かれた人間の像は、カメラの被写体として見物客を集めていた。

バベルの塔は、基底部の窪地しか残っていないというので時間の都合で行かなかったが、この塔は基底部は各辺九十米の正方形でピラミット状に七層まで積み上げられ高さ九十米の頂上の神殿が辺りを圧していたといわれる。

これらの宏大な遺跡の彼方には、ナツメ椰子の林が見守るように茂り、その彼方にユーフラテス河が太古と変らぬ流れを流れている。

かのアレキサンダー大王（BC 356）もこのバビロンに都を置き、メソポタミヤを中心にオリエント文明とギリシャ文明を融合して真の世界的都市国家建設を計ったが若くしてこの地に歿したという（BC 333）。

その当時の日本は未だ弥生時代であり、中国は東周の時代のことである。東洋の夜明け前に、この地は世界の中心地であり、膨大な遺産を残している。そして今日、石油の地として世界の中心となっていること

を考えると、この土漠、砂漠の地が地球の主としての宿命を持っているように思えた。感慨を後にバビロンを去る。カーステレオ又快音なり。

クテシフォン

バビロンより北上してバグダッド郊外のサリマンパークという公園地に着く。大ドームの囲りは木陰と芝生の公園で大勢の人々がくつろいでいた。

紀元二〇〇年代ササン朝ペルシャの王たちによって建てられた大アーチは高さ三十七米、基部の幅二五・二米で全て日干し煉瓦で造られている。かまぼこ型アーチは一本の柱もない驚異的な建造物である。六〇〇年代の宴会場の広間は実に豪華絢爛、多くの詩に賞賛されているという。

紀元六三七年この城がイスラム教徒の手に落ちた時、兵士達はこの広間のカーテンやカーペット、飾りの宝石を先を争って奪ったが、全員に行き渡るほど無数の財宝があったという。

そんなことを考えながら写真を撮っていると子連れの数人の婦人が近寄って来た。子供を撮ると、私達も撮ってくれという。

その中の一人は、わざわざベールをとってくれた。その豊満な胸には圧倒されそうである。

ガイドブックにも、商社の人にも婦人は絶対に写真をとっては駄目だといわれていただけに一寸とまどう。子供を抱いて数人の婦人と一緒に撮ったクテシフォンの写真は思い出深いものとなるだろう。

建物も復元されつつあるが、裏側の風化された煉瓦が年代を物語っている。

満腔の満足感で、十五・〇〇ホテル着。運転手に礼をいい、明日サマラ行きを予約して別れる。

バゲタッドの夕暮

ホテルロビーでビールを一杯飲んで、中西さんと二人で街頭に出た。ハンバーグを買い、囁りながらアリババ広場で記念の写真を撮り、モダンな無名戦士の碑のある中央広場に一休み、銃を持つ衛士に道路をへだてた古いモスクの写真撮影の許可を得たが、惜しくもフィルムがなくなっていた。モスクに行く。老番人に入院許可を得た。靴を脱ぐよう注意され、脱いだ靴を下駄箱に入れてモスクに入る。中はアラベスク文

様の華麗な白と茶の漆喰装飾で、高い天井は宇宙の神秘さをたたえ、人を眩いこむようであった。祭段に一札して、床の絨織に腰を下ろして天井を眺めていると、数人の信者が祭段に面して一列に並んだ。その中の一人が近くにいた小西さん呼び、手真似で仏教かキリスト教かと問うた。小西さんが合掌して仏教というと、吾々イスラム信者は今からお祈りをする。後の方に行くよう注意されたので早速外に出ることにした。無宗教の吾々の無神経さが戒律厳しい信者に不快感を与えたのではないかと心配したが、モスクに入り内部を見ることが出来たのは幸福であった。

千夜一夜物語の舞台バゲタッドは、イスラム世界が広大な領土を誇ったアッパース王朝の都で、壮麗なモスクや宮殿が建ち並び、世界一流の学者や、職人によって築き上げられた当時の文明は最高で、詩人は唱い、踊り子は舞い、限らない栄華と浪費の中で、人々は現世的な楽しみを追い求めたという。

しかし、一二五八年蒙古軍によって完全に破壊され昔の面影は皆無という。(文永の役一二七四、弘安の役一二八一)

今日、石油のおかげで土造りの都市から近代都市に脱皮しつつあるこの都のバイタリティーを感じつつ、日暮れの街を帰路につく。途中、フィルムを売る店はないかとゼロックス店に入って尋ねる。若い店主が親切に地図を書いてくれた。

一九・三〇 東洋ガラスの招待で、スイス料理を御馳走になった。

席上、明日ハトラに行きたいと申し出たが総意は反対であった。高安さんに、ハトラは東京―青森程の旅程で、道路も地図通りに走れないときもあると説明され、中止を決めたが、砂漠に石柱があるだけだという商社の人の言葉に反撥を感じた。

砂漠に数十軒にわたり二重の堀と城壁を築き、外敵に抗した商人の街ハトラは、日本の戦国時代の堺を思わず都市であったという。

砂漠が故に数千年前を物語る石柱が残っている。そして、この国の人は、あの立派な博物館を造って、出土品を大切に保存している。

商社の人は、他国の宝を知ろうとしない

のではないか。

英語を話し、アラビヤ語を話しても、歴史を話せない人は、現地の人と歪みを生ずるのではないかと案じる。

佐伯史談の人々が聞いたなら、もったいないと思うであろう。

十一月十日 (土)

〇八・一五 近くの銀行で換金。

〇九・一五 ホテル発 サマラに向う。

北上の道筋には煉瓦工場が多く、黒煙が幾筋もなびき、困道に並行して列車も走っていたが、南と異なり、黄漠の地である。

一時間程で前方右手に金色のモスクが見えた。チグリス河が堰止められて、青い色の水が目にしめる処サマラに着く。

サマラ

バグダッドの北一二軒、チグリス河左岸にある小さな地方都市サマラは、アッバース朝カリフ・ムウタシムが八三六年にバグダッドから都をここに移し、八九二年再びバグダッドに遷都するまで五十数年首都として栄えた処である。

マルウィヤ・ミナレット、螺旋状の緩やかな階段のあるこの塔は五十二米もあり、

全て黄土色の煉瓦を積み上げられた円筒状の塔で小粒の人間は少しの風でも吹きとばされそうである。頂上は畳四帖半程もあり展望は雄大である。砂漠に消えゆく一本道砂漠を緑にと苦心の森、金色のモスクのある新市街、そして宏大なモスクの廢墟、紀元八〇〇年代に建造されたこの塔は昔の繁栄を物語り、明日への希望の交点である。

バビロンのジグラートの遺跡が知れるまでは、旧約聖書のバベルの塔は、これに似たものと思われていたという。アル・ジャミ・モスク……塔の眼下に広がる壁に囲まれた一万坪以上の広場はモスクの廢墟である。廢墟の中には何一つ残っていない。周りを囲む黄土色の煉瓦の壁は復元され、その偉業を偲ぶすが、太古の風格のないのが残念である。

建物がない丈に塔が壮大に感じられる。シリア派の聖廟……新市街に金色のドームが二つ聳えている。これはシリア派の十番目と十一番目の聖廟でシリア派によれば世界最後の日に衆生を救うためにマハデイ

が現われるとされている。

今日イランの革命主、ホメイニ師もシリア派の僧という。ホメイニ師は、亡命時代一時イラクのシリア派の寺院にいたが、追われてフランスに行ったという。そのせいか、イランとイラクは余り良い仲でないという。世情また混沌としている。

サマラを出発したのは十二時頃であった。待望のハトラへは四時間で行けると運転手はいう。後二十五デナール出せば良いという。ハトラに着けば夕刻になる。日暮れの荒野に古蹟の写真が撮れる。一人でも車を走らすつもりで、同行者の諾を得ようとしたが駄目であった。ホテル着は夜半になり明日帰国の心配もあると遂にあきらめた。

婦路路上に川魚を売る老人がいた。運転手は車を停めて二、三疋買った。老人を写真にとろうとしたら怒られた。車は更に果物を売る店先に停った。運転手はミカンとザクロを買い、その一つを吾々に配ってくれた。小生は早速御馳走になったが、同行者は遠慮したのか、腹加減を考えたのか食べなかった。

十五時前にバゲダッド着。運転手に二十五デナールの運賃の外に一デナールチップをはずみ厚く札を述べて別れた。

バゲダッドの土産店

五人で散歩に出る。アリババ広場を過ぎ中央広場の衛士にモスクの写真許可を頼むと、「ノー」である。昨日の衛士とは異なる返事であった。途中書店に入り絵本を買い、タクシーで一昨日の通りに行く。この運転手感が悪いのか途中二回も道順を聞く。その度にドアの開閉に運転手は神経をとがらす。お陰で鉄工所団地、鋼材団地を通り大いに役立つ。物産の方々もこんな所を案内してくれば良いのにと皆で話す。漸く目的地に着く。運転手は約束以上の金額を要求する。ドアをしめる。運転手はその強さに顔をしかめた。

目的の店に行く。一昨日値切って断られた銀細工店である。娘二人の先客がいた。一人の指輪がきつくなつたのか店主はヤスリで指輪を切っていた。指を傷つけることなく指輪は切れ、娘は去った。

銀の飾皿中小ませて数枚を買う。値切ることをせず箱に入れて貰う。この店主も

鎌倉彫の職人と同じように値切りには応じない。頑固者と見ると飾皿が一きわ立派に見えた。

銅細工を買った店に行く。主人が笑顔で迎えてくれた。小西さんがこの店で又数枚を買う。笑顔の主人と息子に写真を撮らせてもらう。良く撮れたら、木戸君再入国の折お土産にと、夕暮れを気にしてASA400フィルムを交換す。

ハトラに行かなかつたお陰でゆっくり買物も出来た。

帰路の運転手はアンダーシャツ一枚のデブで、客に煙草をサービスする人良しである。当社に小田原から応援に来ていた職人に良く似た人であった。

十一月十一日 (日)

帰国の日である。ホテル会計、四日間二人三九・七五デナールであった。

物産に寄り挨拶す。高安さんが空港まで送ってくれた。税関を出る迄心配そうに見守ってくれた。英語を話せない小生には百万の味方である。厚く札をして税関を通

た。

高安さんが見えなくなった所で荷物検査があった。高野、吉田、木戸三氏は難なく通ったのに、小生は財布を出せと言われた。

英語を話せない小生、財布とは知っていたが、わざと眼鏡を出した。上司らしき者がキャンユースピークイングリッシュと言ったが、黙していると担当官が内ポケットを指したので、財布を出す中を良く見ずに通過させてくれた。小西さんがなかなか来ないので心配していたら、徹底的に身体検査されたといつて来た。

これで一安心。空港ロビーで土産品免税品を買おうとしたら、ここではデナールは通用しないという。自国の貨幣を通用させないまでして、ドル収入に徹したこの国の政策には頭が下がる。

デナールのドル交換も禁止しているので財布のデナールは使い途がない。木戸君再入国のときまで大切に持ち帰えることにした。

日本航空機に搭乗する。日本語が通じ安心である。

テヘランに寄る。アメリカ大使館占拠事

件があったとは知らない小生等には不安感がない。ただ空港には異様に人影が少なかった。

テヘラン発、砂漠の波である。遙か彼方より一本道が延びている。オワンスがある。

その廻りには、土造りの家や、畑もある。

そんな風景に見とれているうちに反対側の窓の彼方に日が落ちて行った。

カラチ着は夜であった。土産店で円が通用したので土産を数品買う。ロビーに猫をさがしたが居なかった。

バンコック着は真夜中であった。

十一月十二日 (月)

短い夜を過ぎて、成田に十時過ぎ着。

蒸し暑い汗が出る、灼熱の国、イラクで出なかつた汗が滲む。

イラク、イラン搭乗客の多いこの便には

お土産品を買う客もいないと思っているのか税関の検査は簡単であった。日本の税関吏も目が高いと、帰国一步は爽快であった。

大阪行きの三人を成田に残して、木戸君と二人で東京行きのバスに乗る。(終)

直川史談会のあゆみ (二)

直川村 小野 農 一

昭和50・8 「直川村郷土史佐藤甚兵衛特集号」発行(二十四頁)

昭和51・4 「直川史談」創刊号発行(十六頁)

内容 会長挨拶・榎牟礼城趾探訪之記・陸地峠探訪之記・薩摩琵琶曲譜「城山」・西南役こぼれ話・陸地峠山上詠歌・黒沢富尾神社神幸祭に詣でて・直川の民話(題字は山下会長の書)

昭和51・4・11 西南の役古戦場陸地峠の探訪と慰霊祭の執行

昭和51・6・7 横川岡の保食神社、仁田原内水の熊野神社の標の古木、大鶴の延命寺庵の仏像、古塔調査。

保食神社の標は四百年以上を経過し、胸高周囲五米六〇糎あり、熊野神社の標は胸高周囲四米七五糎あり、何れも天然記念物に指定すべき銘木である。

昭和51・6・8 県文化財調査委員入江英親先生を招いて「石造美術の種類と保護について」の講演会を行い、午後先生の指導を受けて、赤木地区の古塔調査を行う。

昭和51・6・21 文化財調査委員会を開き、村指定文化財の調査選定を行う。

昭和51・6・25 県主催の文化財巡回教室を開催する。

昭和51・7・1 「直川史談」第二号発行(十六頁)